お薦めの一冊

『アルジャーノンに花束を』

ダニエル・キイス 著　小尾芙佐 訳　早川書房　1,078 円（税込）

学ぶということ

会員　古橋 夏樹（71 期）

知的障害を持つチャーリイは、子供の心を持った優しい性格の青年だった。チャーリイは、知能を飛躍的に向上させるという脳の手術を受けることになる。手術を受けた結果、チャーリイのIQは68から185となり、チャーリイは「りこうになりたい」という夢を叶えた。

チャーリイは知識を得る喜びや難しい問題を考える楽しみを感じる一方で、これまで友達だと思っていた仕事仲間から嫌がらせをうけていたことや、母親に捨てられた事実を認識するようになる。

チャーリイは、IQ185の天才となったが、性格は知能に伴った成長をすることはなかった。知能だけ急激に発達したチャーリイは、周囲の人間とコミュニケーションを図ることができず、孤独を感じるようになる。

「この私にいったい何が起こったのか？　なぜ私は、この世界でこれほど孤独なのだろう？」と。

そんなある日、自分より先に脳手術を受け、彼が世話をしていたねずみのアルジャーノンに異変が起こった。

そしてチャーリイは、自分でアルジャーノンの異変について調査を始め、手術は不完全なもので、一時的に対象者の知能を発達させるものの、性格の発達がそれに追いつかず社会性が損なわれること、そしてピークに達した知能は、やがて失われ元よりも下降してしまう、という欠陥を突き止める。

彼は、失われ行く知能の中で、退行を引き止める手段を模索するが、知能の退行を止めることはできず、チャーリイは元の知能の知的障害者に戻ってしまう。

私は、学ぶことは、自分が見る世界の解像度を上げる作業だと思っている。視力が低いと周囲がぼやけて見えるが、眼鏡を掛けるとはっきり見えるようになるのと似たような感じである。

チャーリイの知能が落ちたあとのセリフに、「ひとにわらわせておけば友だちをつくるのはかんたんです」という言葉がある。

自分にはたくさん友達がいたと思っていたけれども、眼鏡を掛けたら、知的障害を持つ自分が笑われていたことに気付いてしまった。それでも、自分を笑う人を怒れば、周りの人がいなくなってしまう、それよりは、笑わせておく方がよっぽどましだ。そういう思いから出た言葉なのだと思う。

「ぼくの知能が低かったときは、友だちが大勢いた。いまは一人もいない」とも言っている。

眼鏡を掛けて、解像度を上げると、世界の綺麗なものにもたくさん気付くことができるが、一方で、汚いもの、一生知らなくてよかった、そう思うものにも出会うのだろう。

知らなくてよかったものを知ってしまって、それでいて知能が下降してしまう、その真っただ中にいたチャーリイはどれだけ怖かっただろうか。

その直後、いちばん最後の場面で、チャーリイは、「アルジャーノンのおはかに花束をそなえてやってください」と願う。そこで物語は終わる。

「ひとにわらわせておけば友だちをつくるのはかんたんです」と言った直後に、アルジャーノンを想ったチャーリイは、なんて心が綺麗なんだろうとも思った。

学ぶということはとても奇妙だと思う。存在すら知らなかったことが見えてくるというのは不思議なことだ。

奇妙で、不思議だけれども、やはり、新しいことを知るというのは楽しい。だからこそ、人は、学ぶことを止めないのだろう。